

◆インターネット活用教育実践コンクール実行委員会賞◆

〈両部門にかかわる活動〉

「ITでつなが合う日韓の絆—授業は国境を越えて：国際共同授業」

E-KOKORO協議会

〒542-0081 大阪市中央区南船場4-7-21 オーガニックビル503

■実践事例報告の概要

2002年から始めた大阪府柏原市立堅上中学校と韓国釜山市立国際中学校の取り組みを紹介する。従来、国際学校間交流ではITの活用としてテレビ会議を利用するケースが多く、イベント的要素が強く感じられる。しかし、両校の取り組みを通じてサイバーからリアルへとITの本来目的のひとつである実際の人と人の交流を目指した実践を紹介し、その交流を支える行政やPTAなど地域の協力の取り組みも紹介する。

実践のねらい

これまではイベント的になりやすかった国際学校間交流、特に先端IT機器を活用した学校間交流であるが、産官学連携チーム、地域のPTA等が協力して学校をサポートすることにより、先端のIT機器を活用した新しい交流方法について検証することをねらいとする。日本と韓国の学校間交流のうち、日韓国際共同授業「日韓科学実験授業」（大阪府柏原市立堅上中学校—韓国釜山国際中学校）、文部科学省発行「心のノート」を共に学ぶ合同授業（大阪府藤井寺市立道明寺南小学校—韓国金海市立翰林小学校）の2つの実践より、子どもたちの国際理解、コミュニケーション力、学ぶ力の向上を目的に、国境という壁を取り除いて両国の教員やPTAが協力し合い、地域コミュニティーも巻き込んで実践を行うものである。

特徴・工夫・努力した点

教育分野におけるインターネット整備が進むなか、多くの学校で人気があるのがインターネットテレビ会議システムを活用した学校間交流である。しかし、国際間での交流はイベント的になりがちで、言葉の壁や予算面の難しさなどが障害となり、

継続的に行うことは困難なのが現状である。今回の実践では、ITの使用が目的でなく、実際の人と人との交流をメインとし、背景に高度なIT技術が活かされるよう努力した。文部科学省発行「心のノート」を共に学ぶ授業では、家族について両校学生の「思い」や「願い」を発表し合い、「心情」を交流した。

実践内容

実践内容は、まず交流支援体制としてPTAなど地域住民十産官学の連携チームを構成した。それぞれの役割としては、両国間のコーディネイトと経済的支援が我々E-KOKORO協議会、インターネット接続、ハイパーミラー技術支援については大阪大学大学院人間科学研究科の前迫教授研究室と独立行政法人産業技術総合研究所、E-KOKORO協議会参加企業などが中心となり、両国の学校を支援した。今回紹介する授業実践を行うまでの交流校の選定および姉妹校提携については、E-KOKORO協議会、在日大阪韓国総領事館、釜山広域市教育庁などさまざまな機関や人が携わった。

国際交流実践の際に大きな問題となることが2点ある。時間の壁と言語の壁である。時間の壁については、今回の交流は日韓交流であるため時差

がまったくなく、この点については難なくクリアした。次に言葉の壁であるが、これについてはE-KOKORO協議会がその参加企業と共に共同開発をした「子どもたちのための日韓自動同時翻訳サーバー」が活躍した。これは、インターネットを利用した日本語と韓国語の自動翻訳を可能とするシステムであり、開発後はE-KOKORO協議会がサーバー運営を行い、学校の教育利用に無償でサービスを提供しており、教員間の打ち合わせや子どもたちの交流に利用された。ただし、堅上中学校と釜山国際中学校とのコミュニケーションは翻訳サーバー以外にも釜山国際中学校の日本語科の教員や、同中学校の子どもたち自身が学んできた日本語も活躍した。

実践結果

〈大阪府柏原市立堅上中学校—韓国釜山国際中学校〉

数年前からインターネットを利用した「子どもたちのための日韓自動同時翻訳サーバー」を使い、学校行事についてや日常の出来事など、頻繁で自由な意見の交換が行われてきた。2004年8月には釜山国際中学校から教員、生徒合わせて48名が柏原市立堅上中学校を3日間訪問した。その訪問日程の中で、次のような授業が実現した。科学共同授業：交流プログラムのメインとして催され、簡易空気浮上装置をつくり、両校の生徒がその原理と作用について話し合うことを目的に行った。理科室において国際中と堅上中の生徒が同じ班になり、装置の仕組みや、さらに工夫する点について意見を交流した。生徒は授業を通じて、韓国の生徒たちと日本にいる自分たちの違いを改めて認識し、さまざまな考え方を学びとった。

〈大阪府藤井寺市立道明寺南小学校—韓国金海市立翰林小学校〉

金海市立翰林小学校とのハイパーミラーシステムを利用したテレビ会議交流により、交流が始まった。その後、継続した交流が行われる中で、インターネットを利用して、テレビ会議と「子どもたちのための日韓自動同時翻訳サーバー」を併用したサッカーワールドカップアメリカ対韓国戦の応援合戦をリアルタイムで行った。

考察（今後の課題）

今後の国際交流について大阪府柏原市立堅上中学校の仲先生よりコメントをいただいた。「国際的な学校間交流は、単に挨拶や自己紹介だけで終わることなく、互いの将来の進路設計や生き方、言動に目覚しい影響を与えるような効果的なものとして、今後も継続的に行っていくことが望ましい。両校の生徒に自分の生き方に対する交流ができるような深いつながりを持たせたい。同世代の若者として共感できる考え方や、異なる国での考え方の違い、またその背景を認め合えるような交流が土台となり、国際社会において能動的に躍進できる人材の育成が期待される。このような交流をきっかけとして、今後さらに日本と交流国とがよきパートナー、よき競走者となるような関係の構築を目指すものである。

しかし、学校外、地域外、ましてや国境を越えるとなると大きな障壁がある。柏原市立堅上中学校と釜山国際中学校の間では、私たちの活動の結果として両校の姉妹校提携書を交わすまでになり、スムーズな交流のベースになっているが、そこに到達するまで、韓国との往復や、両校、両教育委員会、行政との折衝など大きな課題がたくさんあった。しかし、両校の教員や子どもたちの熱い思い、保護者の理解、我々産官学の連携チームなど呼応しながら進められた結果として、国際共同授業が実現した。

昨今、「教育の情報化」が唱えられている中、学校や教育委員会だけでなく、今回のケースのように学校や子どもたちをサポートする地域コミュニティのあり方が「教育の情報化」を加速させるキーのひとつになるのではなかろうか。

また、なかなか見えないと言われているITが、交流という形をとり見えるものになり、地域の情報化にも大きく寄与するものであることをさらに感じた。実際に保護者の方たちや行政の方たちは日韓自動翻訳サーバーやハイパーミラーシステムなどを目の当たりにし、さらに報道取材により、ITの教育利用へのすばらしさ、インターネットの利便性などに対する理解がさらに深まったと思われる。